【エッセイ】

三月の５日間という幻想

西野　学志

この作品のシナリオは、2003 年、アメリカ軍がイラク空爆を開始した３月 21 日（アメリカでは 20 日）。この日を間に挟んだ５日間における、若者たちを語る戯曲。劇中には７人の登場人物がいるが、その中心にすえられているのは渋谷のラブホテルでその５日間を過ごす男女である。その出会いの経緯には、別の男女が絡んでくる。そして関係のない男が二人。合計で６人の登場人物が交互に現れては消える。

ホールは美術館の中ということもあって、どこか静かな美しさを感じる。高知県立美術館はかなり清潔感にあふれ、じつに居心地のいい空間だった。客席は 100 にも満たないほどの小さなものだ。舞台には一切セットがない。照明だけが場所の転換を伝える装置のようだ。上演時間になる。はじめに、役者らしき人物が舞台にあらわれる。そして口を開く。

「それじゃ『三月の５日間』ってのをはじめようって思うんですけど、第一日目は、まずこれは去年の三月っていう設定でこれからやってこうって思ってるんですけど、朝起きたら、なんか、ミノベって男の話なんですけど、ホテルだったんですよ朝起きたら、なんでホテルにいるんだ俺とか思って、しかも隣にいる女が誰だよこいつしらねえっていうのがいて、なんか寝てるよとか思って、っていう」

まずこの時点で予備知識のない人間には衝撃的だ。このチェルフィッチュという劇団は、独特の指向として、こうした超訳的な現代会話をその

まま舞台に持ち込むというスタンスをとっている。舞台の脚本のためにキレイに作られた言葉ではなく、洗練されない生の空気を舞台装置として使うのだ。

そして男が「アズマ君とミノベ君が会話するシーンをやります」という。もう舞台ははじまっている様子。先ほどの語りは、前口上ではなかったのだ。もうひとりの男が現れる。二人は会話をしているが、どうも要領を得ない。観客はその会話を聞いていて、頭が痛くなりそうになる。二人は前述のような口調で、同じことを３回も４回も繰り返す（あとから判明するが、このときミノベは酔っているようだ）。うわごとのようにナンパした女の話を語るミノベ、それを適当に受け流すアズマ。相槌のほとんどは「へぇそうなんだ」「うんうん」だけである。実にばかばかしい。しかしリアルだ。

彼らはせりふと同時に奇妙な身振りをする。演出家の岡田利規は「日常的所作を誇張しているような／していないようなだらだらとしてノイジーな身体性を持つようになる」ことを計算して、すべての動きを指定するという。これは「日常と演劇の境界を崩す」というコンセプトを徹底的に追及した結果として現れた方法論だと思われるが、この効果として、舞台には一切音楽が流れていないにも関わらず、確固としたリズムが生まれる。ある動作パターンがあるとする。役者は常にこのリズムを刻み続け、あまりに誇張されたリアルをその上に預けるのだ。それは電車が線路を通ったり、扇風機がファンをまわす音のような、日常に埋もれた生活音のような存在である。普段は知覚しないようにつとめているが、一度気になりだすと止まらない。この動作はそういった事象を端的に象徴している。事実、やがてこの動作も見慣れてしまい、気にならなくなる。このあたりは実に巧みな表現である。

そして話はその５日間の２日前にさかのぼる。アズマとミッフィーという女が映画館で偶然知り合う。ミッフィーはアズマに少なからず好意を抱

く。そして緊張と引っ込み思案な性格から、不自然なアプローチをするも（この演技は他の役者とくらべ、抜群に生き生きしていた。誰もが一度は出会ったことのある、自己言及的オタク像だ）、アズマはそれを意にも介さない。彼らは渋谷で、映画の主題歌を担当するバンドのライブを見るという約束（といえるほどの真摯さはなかったが）をする。
後日アズマはミノベと二人でそのバンドのライブを見に行く。そこでミノベはユッキーという女と「デキる」。ミノベとユッキーはその晩渋谷のラブホテルに泊まり、そこから４泊５日の連泊をする。その間、彼らは獣のように（４日間で２ダースのコンドームを使い切ってしまった！）セックスに明け暮れる。たまに食事にホテルの外に出ては日常の空気を新鮮に感じる二人、そしてアメリカの宣戦布告によりはじまったイラク戦争。ここには異常なまでの温度差がある。かたや戦争、かたやアルバイトを無断欠勤して行きずりの相手と性の享楽に酔う男女。リアルとアンリアルをつなぐのが他ならぬ渋谷である。彼らはその二つの間を往復する。

ここで、当初から徹底して不親切であり続けた細かな場所設定が生きてくる。人間同士がどれだけ不安定で流動的であっても、渋谷を初めとする街―独自の名前を与えられた場所空間―は毎日同じように存在し続ける。人々の意識にかかわらず、大きな生命体と化してその街の空気を作り出す。毎日さまざまな人間がやってきてそれぞれが過ごしているはずなのに、いつも同じ型を見せるのだ。地球から月の裏側が見えないように、普段の渋谷は、「渋谷という街」の一面でしかないのである。だが彼らはその裏側に迷い込んでしまった。戦争とそれからの逃避（というか彼ら自身はそれに面してもいない）という事実が彼らをするりと裏側へ抜けさせたのだ。曖昧であり続けたこの戯曲の持つ全体像が明るみに出る。

だが、そこから事態に大きな変化があるわけでもなく、彼らはすぐにホテルに帰る。そしてまたショート・トリップ「いつもと違う渋谷」を楽しむ。彼女は５日を共に過ごした男ではなく、この非現実感を愛していた。「奇跡だと思う」とまで語っていた。

一方、渋谷の街頭では反戦のデモ行進が行われていた。その行列の中にヤスイとイシハラという男たちがいる。彼らはたいした主義も主張もなく、何となくデモに参加していた。そして何となく声を上げ、何となく家に帰る。奴隷のような歩き方。まるで抑揚のない演技。劇中に蔓延する曖昧さはくどさを増す。そして今や、この曖昧でリアルなオムニバスが、完全に立ち上がっている。

そして休憩を挟む。閑話休題。だが、はたしてこの休憩にどれほどの意味があったのか。この休憩を挟んで第二部がはじまるのだが、この第二部は１５分ほどしかない。ここからラストまで、一気に展開して終わっても良いのではないか。なぜあえて休憩を入れたというのか。その意図がいま一つ掴めない。ここでも演劇のタブーに挑戦したのだろうか。ここでかかっていた音楽は、普通のメロウなインストナンバーだった。劇中のＢＧＭのように突発的に鳴ったり止んだりするものではなかった。そして再開。

ユッキーは５日目の帰り道、道端で脱糞している浮浪者を見かける。彼女は当初発見したとき、「でかい犬がいる」としか認識しておらず、その犬の正体を認識したとき、驚きと、その光景のあまりの生々しさ、犬としか判断できなかった自分に吐き気を催す。この描写は、実に秀逸だと思う。浮浪者もれっきとした人間なのに、犬にしか見えなかったという現実。偏見や差別のまなざしなどではなく、単に目に留まったものに対する判断が、もはや人間を見るそれではなかったのだ。ここに人間のもつ多面性が描かれている。自分は４泊５日のセックス三昧という本能に任せた非常識なトリップをしていながら、他人の排便にはまるで思いもよらない。私にしてみればどっちもどっちでけだものじみているが、彼女にしてみればそんな風には考えられないのだろう。皮一枚はがせばみんな同じだというのに、その一枚が意識に決定的な差異を生み出す。公衆の道路で排便するという行為が、人間とけだものの境目をあいまいにしてしまう。そして、彼女の

浮遊していた「いつもと違う渋谷」が一気に「グロテスク」で生々しい渋谷になり、彼女は現実に立ち戻らされる。感じていた浮遊感は、ない。少しの感傷も、持ってはいない。ここで暗転。

そしてミノベとユッキーがホテルを出る。ミノベの手持ちがないため、二人は銀行に寄る。そしてホテルの代金を清算、家路を歩き出す。二人とも渋谷駅までは同じ道だった。「いつもの渋谷に戻ってしまうことが怖い」とユッキーは言う。さながら本当に旅行しているような感傷である。連れ立って去っていく。

暗転。舞台は終幕を迎える。役者たちはカーテンコールのため舞台へ集合する。そしてアフタートークへ移行していく。ホールには、集中した空気が発散していくときの感触が満ちていた。

この舞台の評価は、はたしてどの視点から見れば正しいのだろうか。台詞や振り付けといった演出の斬新さ、批評的感性、その手法は確かに評価されるべきだろう。だがそれはサブカルチャーとしての文脈でこそ生きるものである。演出家の岡田は、この属性を正しく理解できていない。その証左というのが、岡田が「反戦」というありふれたイデオロギーを安易に付与したことにある。直接この作品で述べられることはないが、この舞台後の対談や、ＨＰの作品紹介などを見れば、岡田は明らかにそう言及している。この舞台のスタイル、それはあくまで「浮き彫りに次ぐ浮き彫り」によって生かされるものではないのか。あくまで主題を迂回することが逆に主題となっていることは明らかであるのに、岡田はその積み重ねを一蹴するのだ。これさえ演出だというのなら何も言うことはないが、私にはそうは思えない。ポップカルチャー、とくにサブカルチャーの文脈において、主体と客体の一致は大きな焦点となる。つまり作者と作品の間には、切り離すことの出来ない関係があるのだ。それが大衆化されていく（安易なイデオロギーの付与）過程で、失われてしまう魅力というものが存在するの

だ。この作品のもつ最大の武器は、茫洋とした自己同一性の根拠を他者への依存という形で追求できる点―それは同時に他者への（他者からの）依存から逃れられないことへの自嘲性をはらんでいるが―である。それにも関わらず、岡田はそれを放棄してしまうのだ。この意味で、「三月の５日間」という戯曲は、その評価を少なからず低めてしまうことになるだろう。

だが、先にも述べたように、この作品の切り口は光るものがあり、純粋に面白い作品ではある。私は十分楽しめた。批判的になればその材料は尽きないが、作品自体にはそれでも押し切ることのできる力があると私は思う。いかにも「サブカル好き」に受けそうな印象をもったが、一般的にも十分評価されるものだろう。この作品は賛否両論あるだろうが、その実、新しいことをやっているというエクスキューズのもとに、受けそうなことを狙っているという感はいなめないのも事実である。

（このエッセイは 2007 年度前期に開講された比較表現論Ｉの課題レポートを改稿したものである。）